

メッセージアウトライン 創世記24:1～27「イサクの結婚Ⅰ」

神のアブラハムへの祝福の約束はイサクへと受け継がれていく。

[1-4]「アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。主は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた」(1) イサクはアブラハムの百歳の時の子。(21:5) イサクの結婚は彼が四十歳の時であった。(25:20)したがって、アブラハムはこの時は百四十歳であったことになる。サラはすでに死んでいた。→23章

彼は主によって、外的にも内的にも経済的にも人間関係においてもあらゆる面で祝福されていた。

彼は自分の全財産を管理している、家の最年長のしもべに一つの重大な使命を授ける。(2)

「あなたの手を私のももの下に入れてくれ」…当時行われていた人格と人格とのかかわりを前提とした厳粛な誓約の方法。これは主にかけての誓いであった。「…私はカナンの間に住んではいるが、あなたは、その娘たちの中から、私の息子の妻を迎えてはならない。あなたは、私の国、私の親族のところに行って、私の息子イサクに妻を迎えなさい」(3~4) アブラハムとその子孫は決してカナンの先住民たちと同じようになってはならなかった。そのことの危険性は彼の甥のロトがソドムの住民となって、どのような悲惨な結果になったかということからもよくわかることである。「私の国、私の親族のところ」彼が親族と別れて出発して来たメソポタミアのハランの地。→11:31,12:5 アブラハムは故郷の自分の親族の中からイサクのために妻を迎えるようにと、しもべを遣わす。ハランの親族は神のかえりみと恵みと配慮の中にあっただと思われる。当時の習慣として息子の妻を定めるのは父親に大きな権威があった。

[5-9]「もしかしたら、その娘さんが、私についてこの地に来ようとしなくてもいいかもしれません。その場合、ご息子をあなたの出身地へ連れて戻らなければなりませんか」(5) これは結婚をどうしても成立させるために相手の要求を飲み、息子イサクがハランに住むようになってもいいかのしもべの質問である。

アブラハムは彼に言った。「気をつけて、息子をそこへ連れて戻ることのないようにしなさい」(6,8) アブラハムの祝福は、自分の国を離れて、神のことばを信じて歩んできたことにある。それゆえ祝福の契約を受け継ぐべきイサクが、父の信仰の決断以前の地に戻ることは考えられないことである。「あなたの子孫にこの地を与える」と神が誓われた以上、この地でイサクの子孫が与えられるのは当然とする強い信仰がここにある。そのために、「その方が、あなたの前に御使いを遣わされるのだ。あなたは、そこから、私の息子に妻を迎えなさい」(7)と確信をもって言うことができたのである。たとえ親族であっても神がアブラハムに約束された地で祝福にあずかる者とされるために、やはりその親族の地から出て来る必要がある。「もし、その娘があなたについて来ようとしなくてもいいなら、あなたはこの、私との誓いから解かれる」(8) その娘がついて来ないならば

神の定められた人ではない。あなたはイサクの妻を連れて来る義務から解かれるとの意。それで、しもべはこのことについて彼に誓った。(9)

[10-11] しもべは従者たちとともに十頭のらくだに主人のあらゆる良い品々を積んで出かけた。もちろん道中の食料なども満載していったことだろう。「アラム・ナハライム」メソポタミア地方の北部。「ナホルの町」アブラハムの兄弟ナホルにゆかりのある町と思われる。ここに行くまでは約一か月はかかったと思われるが、道中のことは何も記されていない。彼の一行は神の導きのもとに無事に到着した。(10)

夕暮れ時、彼はナホルの町の外の井戸のところであぐらを伏させた。休ませるためである。この時刻は女たちが水を汲みに出て来る頃であった。(11)

[12]そうして言った。「私の主人アブラハムの神、主よ」この表現は、しもべ自身は神を信じていなかったということではなく、神とアブラハムとの契約を彼がよく知っていたがゆえの祈りである。「恵みを施してください」恵みはそれを受けるに値しない者に対して与えられる神の恩寵であり、いつくしみである。しもべはこの恵みを祈り求める。

[13-14] ここはアブラハムのしもべの具体的な祈りが記されている。それは彼が、水を汲みに来た娘に水を求めた時、その娘が彼だけではなく、気を利かせてらくだにも水を飲ませてくれたら、その娘こそ、主人の息子イサクのために定めておられた女性であり、このことで、あなたが私の主人アブラハムに恵みを施されたということ、私が知ることができますようにというものであった。この祈りの内容は、良い妻となるべき娘の人となりを見極めるためであり、それは見知らぬ旅人に対しても、親切で行き届き、らくだの必要さえも見落とさないという、現実生活において十分心配りのできる成熟した人という点を条件とするものであった。そしてアブラハムのしもべは、この自ら定めた基準が神のみこころと一致することを願う。

[15]「しもべがまだ言い終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せて出て来た。リベカはミルカの子ベトエルの娘で、ミルカはアブラハムの兄弟ナホルの妻であった」

神のこの応答のすばやさは、確かに神のみこころが行われていることのしるしである。メソポタミアでは水がめを肩に載せて運ぶ。エジプトでは頭に載せる。ベトエルはアブラハムの甥にあたる。この甥のベトエルの娘がリベカである。ミルカはアブラハムの兄弟ハランの子であり、ロトもハランの子である。→11:27-29

[16-17] この娘は非常に美しく、処女で男が触れたことがなかった。アブラハムのしもべは彼女のところに走って行き、水を求めた。唐突な願いへの対応の仕方はリベカの人物を知るための絶好の機会であった。

[18-20] 彼女は頼まれると躊躇なく喜んで水を与えた。「ご主人様」親しみのある呼び方である。彼女は全部のらくだにも水を汲んだ。水を運ぶために、何度も井戸に行って水がめに満たし、往復することはかなりの重労働になったであろう。リベカの行動とそこに示されている彼女の人柄にアブラハムのしもべは深く感動したことであろう。そしてそれは、何よりも神のみわざの確かさを知る者の驚きでもある。

[21]「この人は、主が自分の旅を成功させてくださったかどうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた」　すべては彼が祈ったとおりに運んでいる。

[22-23]「重さ一ベカの金の飾り輪」一ベカは5.7グラム　「重さ十シケル二つの金の腕輪」十シケルは114グラム。二つで228グラム。「あなたは、どなたの娘さんですか」しもべは祈ったことがかなえられた感動を胸にしつつ、主の導きを確認しようとする。

「あなたの父上の家には、私どもが泊めていただける場所があるでしょうか」これも話の流れとしては当然のようであるが、もちろん肯定的な答えを確信してのことであろう。

[24] リベカの自己紹介によって、しもべは彼女とアブラハムとの血のつながりを知った。

[25-27] 「『藁も飼料も、私たちのところには、たくさんあります。それに、お泊りになる場所も。』その人は、ひざまずき、主を礼拝して、こう言った。『私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は、私の主人に対する恵みとまことをお捨てになりませんでした。主は道中、この私を導いてくださいました。主人の兄弟の家まで』」

アブラハムのしもべは、彼を喜んで迎えようとするリベカのことばに、すべてが主の御計画によることを認めて、その場で礼拝をした。主なる神のなされることに一切無駄はない。主は最短時間でしもべをリベカのところへ導かれたのである。

アダムの墮落、ノアの大洪水による全世界のさばき、その後の人類の広がり、バベルの塔の出来事による言語の混乱、セムの系列からアブラハムへと神の選びと導きは進められてきた。そして今、老年を迎えたアブラハムからその子イサクへと神の祝福の契約は受け継がれていく、ここでは主はアブラハムのしもべの働きを通してイサクの妻となる女性を示された。このイサクとリベカによって神の救いの御計画はさらに進められていくのである。

アブラハムのしもべが真剣に主の導きを祈り願ったように、私たちも主のみこころが私たちの上になりますようにと熱心に祈りつつ、導きを願っていくことが大切である。

→ピ°リ° 4:6, I ヨハネ5:14